

2015年度 ジェンダー学際研究専攻（地理学分野）博士論文要旨

農村に移住する若い女性と身体化される「場所」－福島県昭和村からむし織体験生「織姫」の語りから－（英題：Young female migrants and embodied 'place' in a Japanese rural village: Focusing on the weaving princess training program in Showamura, Fukushima)

久島 桃代 (KUSHIMA Momoyo)

論文構成

I 研究の背景と目的

1. 現代農村に移住する若者たち
2. 本研究の目的と研究方法
3. 本研究の構成

II 農村空間の商品化

1. 戦後の農村空間の変容
2. 地域づくりと外部からの担い手
3. 農村へのまなざしの変化
4. 日本における農村空間の商品化
5. 農村に向かう若者たち

III 人文地理学における「身体」と「場所」－非表象地理学とジェンダー視点からの再考

1. 人文主義地理学による「身体」の取戻しと「場所」の再考
2. フェミニスト地理学による「身体」と「場所」－人文主義地理学に対する批判から
3. 非表象地理学における身体的実践への着目

IV 昭和村に入る－対象地域の概要

1. 福島県昭和村の概況
2. 昭和村に入る

V からむし織と織姫制度の創設

1. 「からむし」とは
2. 昭和村におけるからむし
3. からむし織ができるまで
4. 織姫制度の創設

VI 織姫たちの語り

1. 織姫たちのプロフィール
2. 4名の織姫たちへのインタビュー

VII 「織姫」であることと「利他的」な場所感覚

1. 織姫制度への参加の経緯
2. 「織姫」であることの恩恵
3. 「よそ者」が来ることの恩恵
4. 「よそ者」であることとジェンダー
5. 経済的不安と「利他的」な場所感覚

VIII 身体を通じて感得されるからむしの世界

1. 身体知としてのからむしの作業工程とその精神性
2. 身体を通じて覚える感覚
3. 村の中で「生きられる」からむしへの愛着

IX おわりに

1. 結論
2. 今後の課題

あとがき－昭和村を出て－

論文要旨

本研究は、福島県昭和村に移り住んだ「織姫」と呼ばれる女性たちを取り上げ、昭和村の何が彼女たちをこの場所に繋ぎ止めているのか、また、「村を出る／出ない」の選択の狭間で揺れながらも、それでも村に残ることを選択する彼女たちにとっての、村での一瞬一瞬の意味を考えることを目的とする。以上の検討により、既存の研究では十分に検討されているとは言い難い、農村に移り住む女性たちと場所との関わりのリアリティに迫ろうとした。

福島県昭和村では、1994年から「からむし織体験生制度」（以下「織姫制度」）と呼ばれる制度を実施している。そこでは、「織姫」「彦星」と呼ばれる体験生たちが約1年間にわたり村に住み込みながら、昭和村の特産品であるからむし織の製作を体験する。からむし織の「からむし」とはイラクサ科の植物で、会津では戦国時代から生産が始まったとされ、越後地方に送られたからむしは、越後上布・小千谷縮の原料となってきた。しかしながら、戦後、着物需要が低下したり、化学繊維が普及したりするようになると、昭和村のからむしは売れなくなった。その打開策として1970年代に誕生したのが、村特産の織物「からむし織」だった。

村に残った織姫たちにその理由を尋ねても、「苧引き（からむしから繊維を取り出す作業）を続けたかったから」「一番の理由はからむし」という簡潔な答え以上の説明を引き出すことは難しい。彼女たちの人生（ライフ）の中で、からむしはどのような意味をもった存在として立ち現われるのか。また、身体を通じてからむしと関わる中で、昭和村という場所への彼女たちの思いはどのように形成されるのか。これらの問いを考えるため、本研究では方法論としてライフストーリー・インタビューを、理論的枠組みとしては非表象地理学の議論を採用した。

非表象地理学とは、英語圏の文化、社会地理学において2000年代に入ってから注目を集めるようになった、空間や場所に関するオルタナティブな視点、記述法を指す。それまでの地理学では、場所に込められた意味や記号を解釈する表象研究が主流を占めていたのに対し非表象地理学では、表象された景観だけ

ではなく、それが個々の人々にどのように了解され、結果的にかれらの体験をいかに方向付けるものなのかまで問題にする。そこでは、身体と場所との五感を通じた遭遇においてこそ場所の意味は構築されるとして、身体的実践の具体的な中身に注意が向けられる。本研究では、からむし織という身体的実践がどのような内実をもち、織姫たちの生き方にどのように作用しているのかを明らかにするため、単に語りを聞くのではなく、筆者自身も昭和村に住み込み「移住女性」となった上で、参与観察とライフストーリー・インタビューを行った(2015年4月～11月)。移住に踏み切った理由は、「苧引きを続けたかったから」というような、昭和村で暮らし、からむしに触れた当事者でなければ理解できないような「感覚的な」語りを理解するためには、私自身の身体を通じて昭和村を体験する必要があると考えたからだ。

このような経緯を経て作成された本研究は、調査者である私と調査協力者である織姫がそれぞれの経験をより合わせ、紡ぎ出した語りに依拠している。いわば本研究は、私と織姫との相互作用の産物ともいえるのである。そのため論文の中では、私がどのような過程を経て調査者として織姫と向き合ったのか、そのプロセスも可能な限り提示した。

本研究は、織姫となった女性たちの経験や場所への思いを考察するものであるが、一方で彼女たちが村で置かれている立場や状況にも留意する。からむしで生計を立てることが困難なために、織姫たちが村で長くからむしに関わるためには、村で安定した職業に就く男性の配偶者になることが条件となる。そうでない場合、未婚の織姫たちは不安定な存在とならざるを得ない。また織姫たちは、村人たちから多かれ少なかれ村の再生産労働を期待されている。以上の点から、「織姫」になること、「織姫」として村で生きることは、ジェンダーやセクシャリティの問題とも交差しているといえる。織姫たちの思いを把握する際には、このような織姫たちの現実を取りこぼしてはならず、こうした状況が彼女たちの実践や内面にどのような影響を及ぼしているのかまで考察する必要がある。

以上の問題意識に基づき研究を行った結果、以下のことが明らかとなった。上記のような織姫たちの状況は、村で生活することを「1年くらいしか考えられなかった」というような、非常に「刹那的」な織姫たちの場所感覚を形成していた。そして、そのような場所感覚が、彼女たちをからむしの作業に向かわせる大きな動機づけともなっている。また、からむしの収穫や苧引きといった身体的な作業に村人たちとともに関わることは、村人たちと彼女たちの間に確かな信頼関係をつくり、それが彼女たちとからむしとの関わりを持続的なものにした。彼女たちを村に残らせたりする要因となっていた。さらに織姫の中には、苧引きの作業に没頭する中で、刹那的であるはずの場所感覚の中に「昭和村で今生きている」ことの確からしさを実感し

ている人もいた。

また、織姫たちのライフストーリーからみえてきたのは、村の中で脈々と営まれてきた栽培を中心としたからむしの文化が、それに感化された織姫たちの生活の中で新たに意味づけられながら生きられているという状況であった。からむしに、これを支えてきた人々の生活を重ね合わせる織姫は少なくない。彼女たちにとってからむしとは、織物の原料であるのと同時に、村の人々の暮らしと切り離せないものなのだ。村から用意された体験メニューをこなすだけの域を超え、それぞれの織姫たちはその文化を次の世代に残す橋渡し役へと自らの役割を変えている。このほか、織姫の中には、経済的な尺度から見れば決して合理的とはいえないからむしの栽培にやりがいを感じ、可能な限りからむしを中心とした生き方を続けたいと思っている人もいた。織姫たちの身体と分かちがたく結びつきながら、からむしと昭和村は彼女たちにとって意義あるものとして生きられているのである。

(主指導教員：熊谷圭知)